



黒柿
Black Persimmon
Diospyros kaki




稲刈りの終わった田園にたわわに実った柿の実は、日本の晩秋を象徴する風景。渋柿の一部が黒くなったものを黒柿と言う。年輪とは無関係に黒い部分が生まれ、縞柿、鶉杓[うずらもく]などと呼ばれる。雅味のあるその風貌は古より王朝人に好まれ、工芸品に用いられた。

紅梅
Japanese Apricot
Prunus mume



桜などバラ科の樹木は桃色の美しい色合いのものが多く、中でも梅、特に紅梅は緻密で赤味が強くひとときわ趣があるが庭木などが多く大径木は少ない。また樹皮の巻き込みや曲がりも多く大きな作品にはならない。春の訪れを告げる梅花を思い出させる材の表情は愛すべき工芸品にはふさわしい。

松
Pine
Pinus densiflora



松は古より神の宿る木として大切にされてきた。正月の松飾りは現代でもなお続く。葉の緑も幹の赤茶色との対比で一層美しい。幹の美しさや吉祥性の意味から、赤松の皮付床柱はなかでも格の高いもの。近年、松枯れ病が蔓延し、松材そのものが危機に瀕している。

クス
樟
Camphor
Camphora camphora



衣替えの季節の樟脳[しょうのう]の匂いを知っている世代もいまや少なくなった。散孔材で彫りやすく、彫刻や木魚に使われる。防虫効果から抽斗[ひきだし]材にもなる。まれに大きなコブができ、美しい玉杓[たまもく]がとれる。アジアに連なる照葉樹林の代表で、各地でさまざまな民俗伝承を生む。

桐
Paulownia
Paulownia tomentosa Steud.




国産材の中で最も軽いが強度もあり筆筒、抽斗材や美術品の外箱に賞用される。白く清潔感があり、柔らかいので収納物を傷めず乾湿から守る。茶道の利休好みの棚木に多用される。色を美しく保つのは難しく、戸外で十分雨にあててアクをよく抜かないと無残に変色してしまう。

杉
Cedar
Cryptomeria japonica



杉は柾目も賞用するがそれ以上に板目を愛でる点が檜と違う。中心部に少し板目がほどよく入ったものを「中空[なかもく]」といい、天井板の高級品だ。産地名を冠した銘木は秋田、春日、天竜、魚梁瀬[やなせ]、薩摩、屋久ほか各地にあり、家具にも使われる。有名な屋久杉は樹齢千年以上のものを言う。

檜
Cypress
Chamaecyparis obtusa




柾目を尊び木肌の清浄感から神仏具によく使われる。また寸法安定性に優れ漆器の素地に使われるが、木地のままで家具になることは少ない。耐候性、割裂性に富み、製材道具の未発達の前時代から大建築に利用された。木曾が産地として有名なが集散地であった尾張の名をとって「尾州[びしゅう]」と呼ぶ。

枹
Japanese Horse-Chestnut
Aesculus turbinata




大きなテーブル材としての需要が多く、蕎麦屋などでおなじみ。しかし枹の本領は縮杓[ちぢみもく]の美しさだが、そういう材は多くない。一寸に10の縮みが入る十縮[とちぢみ]は貴重品。さらに木肌にリップルマーク(漣紋)と言う特徴があり、きれいに鉋がかかると真っ白で絹のような光沢が現れて感動する。

ニレ
榆
Elm
Ulmus davidiana



榆は檜に似た良材だが名前が知られている割には日本の木工芸で用いられることは少ない。流通量が限られているうえ、同属の欒と混用されるためだろう。しかし実際には結構使われている。まれに現れる櫛材[こぶざい]は特に西洋において化粧合板に多用され、ある時代の家具を飾った。

桜
Cherry
Prunus jamasakura, Prunus ssiroi



家具材としては山桜を賞用し、専門家は本桜と呼ぶ。山奥で薄桜色の花をつける。花の色に似た美しい材色を呈す。緻密でくいの少ないので昔から版木に使い、梓も桜の仲間ですこから出版を「上梓[じょうし]」と言う。和洋を問わず品の良い家具に仕上がる。

ケンゴナシ
猷保梨
Japanese Raisin Tree
Hovenia dulcis




なじみのない名だが明治時代以降の和家具、特に関東でよく使われる。硬さも中庸、木目のはっきりした環孔材で使いよい。欒ほど豪快でないが、品がよくどこかモダンな感じで、和洋どちらにも合う不思議な材。明治の文明開化の頃、和製西洋家具に用いられた。

シタン
紫檀
Siam Rosewood
Dalbergia cochinchinensis




紫檀、鉄刀木[たがやさん]、花欄[かりん]など南・東南アジア産材を唐木と呼ぶ。中国を集散地として輸入されたことによる。紫檀は時代によって樹種が違い、大名家などに伝わった室町時代以前のを「古渡[こわたり]」として特に珍重する。重く硬いため普通の鉋では削れず、立ち刃鉋を用いるなど一般の家具、指物職と違う技術が必要で、古くから専門化した。

檜
Oak
Quercus crispula




英語のOakはこの材を指し優良家具材。以前国内では雑木として評価されなかったが、北海道材は良質で盛んに輸出された。浮ついた仕事を拒絶するしっかりした内実を感じさせ、好感の持てる材である。柾目材でウイスキー樽を作り、多く含むタンニンが独特の風味を醸し出す。北海道材は今では貴重である。

欒
Zelkova
Zelkova serata Makino



大径木が採れる優良材で、力強い木目から民家の家具に喜ばれる。上手の家具、指物にはあまり使われない。しかし正倉院の「赤漆文櫛木御厨子」は別格。文なす欒(文櫛木)の美しさを全面に出す。平野部の欒は青みを帯びて硬い。山地の赤みを帯びた材で、齢を重ねたものには玉杓、如鱗杓[じょりんもく]などと呼ばれる美しい杓が現れる。

栗
Chestnut
Castanea crenata



栗は軽くていい。また品を落さずに趣がある。素朴だが粗野なところがない。表面に加工痕を美しく残す名栗仕上げがあり、鉋目を残した侘びた仕上げもよく似合う。日常の木工品で使うには最適だが、高い格調や精神の緊張を求めるのならやはり栗などがよい。

桑
Mulberry
Morus kagayamae



木工には山桑が用いられ、年輪の明快な緻密な材で重用される。黄色みを帯びた色から褐色に変化し、「桑色」として喜ぶ。伊豆七島の御蔵島産を「島桑」と呼び、特に珍重する。近代の木工芸の著しい展開は、ひとえに三宅島出身の木工家、前田桑明による島桑の再発見に始まる。

エンジュ
槐
Japanese Pagoda Tree
Maackia amurensis Pupr. & Maxim.



それぞれの木材には寸法安定性などの物性を越えた固有の持ち味がある。槐は材としても優れているが、表情は欒のように粗野にならず、かと言って桑のように格式ばったところもない。大径木は少ないが柾目は年輪ごとに色味が違い趣がある。品があり古代中国で三公の象徴にたとえられたことも頷ける。

キハダ
黄蘗
Amur Corktree
Phellodendron amurense Rupr.



材は淡黄褐色で、樹皮の内側が鮮やかな黄色を呈するのが名の由来。漢方薬(黄蘗)や染料にもなる。比較的軽軟材だが和風の趣があり、まれに縮杓や波杓があらわれ好まれる。「女桑[めぐわ]」などの名で桑の模擬材として扱われることも多いが失礼な話だ。しっかりした特徴を持つ良材。黄肌、薬とも書く。

タモ
榊
Ash
Fraxinus mandshurica Rupr.




プロ野球のバットはトネリコ材が多いが、子供用にはタモを使う。粘り強さが特徴。他の材にない白みがかかった色を呈す。この点から和家具はもとより柾目を生かして椅子など洋家具にも合う。比較的玉杓が出やすく、茶筆筒の抽斗の前板などに喜ぶ。家具材の中ではまだ流通量も多く、長尺材も採れる貴重な材。正しくはヤチダモ。

ホオ
朴
Big Leaf Magnolia
Magnolia obovate Thunb.



小学校で年賀状の版木として使った方も多だろう。柔らかいので初心者向き。緑がかかった、ほかにない色合いで面白い。しかし木目がはっきりせず飾り気がなく、まさに素朴だ。家具の主要材になることはほとんどなく、洋家具の抽斗や鎌倉彫の素地になる。広葉樹中最も大きな葉をつけ、その姿は新緑の山でもひととき美しい。

シカモア・メープル (西洋梔楓)
Sycamore Maple
Acer pseudoplatanus



日本の楓に比べ柔らかく抜群の安定性を誇る。真っ白で絹のような光沢があり、細かく規則正しい縮みが入った材はとても貴重だ。ヴァイオリンの背板で有名。中央ヨーロッパ産が良材とされ、私はもっぱらフランス産を愛用している。